様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 14 日現在

機関番号：34424
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2010～2012
課題番号：22792237
研究課題名（和文）　外傷性高次脳機能障害における生活の変化と対処法に関する研究

研究課題名（英文）　Study on impact to life and coping method in Traumatic Brain Injury

研究代表者
山居　輝美　　（YAMAI TERUMI）
梅花女子大学・看護学部・講師
研究者番号：50326287

研究成果の概要（和文）：関連分野におけるレファレンスを行い、受傷直後の外傷性脳損傷者の家族のニーズは非常に高く、特に情報へのニーズが求められていることが分かった。対象者 4 名に延べ 6 回、聞き取りを行い、質的研究デザインを用いて分析した。3 年間の研究を通して主介護者は、脳外傷後に起こり得る人格の変化など、予後について説明を聞いた者とそうでない者とではその後の対処方法が異なっていた。説明を聞いた介護者は、予期せぬ出来事が突然出現したことに困惑しながらも、医療者が発した「意識状態の改善」の言葉を支えに患者の介護を行っていた。一方、説明を聞いていない介護者は、予期せぬ出来事が突然出現したことに困惑しながらも、身体状況が改善すれば意識状態や人格の変化が元に戻ると思いそのことに希望を見出していた。

研究成果の概要（英文）：After reading articles and books from related fields, I have found that family needs of Traumatic Brain Injury (TBI) patients are very high during the acute period, especially to the information needs. The subjects are 4 family members and the total of 6 semi-structured interviews were conducted. The interview data was analyzed qualitatively. The main caregivers, with or without prognostic information given, took different coping methods. The caregivers with prognostic information became confused about unexpected incidents happening suddenly.　But supported by the word, “improvement of cognitive condition”, they continued to take care of the patients. On the other hand, the family without clear explanation became confused about unexpected incidents happening suddenly. But they believed that patient’s problem would go away together with the recovery of their body injury.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	600,000	180,000	780,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
2012 年度	800,000	240000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学、生涯発達看護学・家族看護学
キーワード：外傷性脳損傷、外傷性高次脳機能障害、家族、支援、対処法

様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

１．研究開始当初の背景

(1) 厚生労働省が行いまとめられた「高次脳機能障害者支援の手引き」には、外傷脳損傷者は、個々には重症度も障害の現れ方も異なり、家庭での自立した生活、さらには就労など社会参加の拡大を支援する技術の開発には未だ数多くの課題が残されていると述べている。

(2) 高次脳機能障害者におこる性格の変化および感情の起伏は医療者にも理解されているが、どのように対処した方がいいのかはあまり理解されていない。高次脳機能障害の全貌を明らかにすることは容易ではないが、性格の変化や行動の変化によって家族が体験する生活の変化について調査を行うことでその様相を明らかにし、理解が難しい行動に対応する際の不安を緩和することができると考える。

２．研究の目的

外傷性高次脳機能障害者とその家族が経験した性格の変化や感情のコントロールの困難さから生じた家族の生活の変化の様相および、家族が直面した性格の変化や問題行動への対処法を明らかにすることを目的とする。

３．研究の方法

(1) 外傷脳損傷者家族についての文献検討を行う。

(2) 外傷脳損傷者を介護する主介護者にインタビューを行い、自分が引き受けた生活の変化と対処法について聞き取りを行う。

対象者；近畿圏にある患者会に参加する外傷性高次脳機能障害者家族

調査方法；半構成個別面接法によりデータを収集し、質的研究デザインを用いて分析を行う。

研究を始めるにあたり、所属する機関の研究倫理委員会にて研究実施の承認を得た。また、対象者の募集にあたっては、まず、対象者が所属している家族会の会長に研究の目的・内容・対象者について説明を行い、許可を得たうえで、対象者の紹介を受けた。紹介を受けた対象者に研究の趣旨を依頼書を用いて口頭にて説明を行い、倫理的配慮についても承諾を得た上でインタビューデータを収集した。インタビューは、対象者の希望した場所で行い、個室で内容が他に洩れないよう配慮した。インタビューデータは、録音し逐語録に起こした。

４．研究成果

当初、2.研究の目的にあるように、外傷性高次脳機能障害者とその家族が経験した性格の変化や感情のコントロールの困難さから生じた家族の生活の変化の様相や家族が直面した対処法について明らかにすることを目的としていた。しかし、実施していた文献レビューの結果、同様の報告（Ishikawa,Suzuki ら、2011）がなされていたため、外傷性脳損傷を受けた家族がどのような情報や支援を受け、その後の見通しを立てて過ごしているのか明らかにすることを目的とした。

Fumiyo ishikwa,Sumie Suzuki,Akiko Okumiya,Yasuko Shimizu, Experiences of Family Members Acting as Primary Caregivers for Patients with Traumatic Brain Injury, REHABILITATION NURSING,36,2,73-82,2011.

(1) 文献検討について

① ニーズについて

Kolakowsky-Hayner (2001) らによると外傷性高次脳機能障害者家族にとって、急性期にある患者の家族のニーズは非常に高いが、そのなかでも健康に関する情報ニーズ（Health information needs）とケアへの参加ニーズ（Involvement in care needs）は満たされていた。また、社会的支援(social support)は、情緒的サポート、情報的サポート、道具的サポート、評価的サポートに分けられている(Arango-Lasprilla JC,Quijano MC,ら,2010)が、ICU 入室中の家族に共通したニーズとして、情報的ニーズは非常に重要だとする文献が多くみられた(A.Elaine Bond, Christy Rae Lee Draeger,ら.2003, Mathis, M,.1984)。

対処法についてみてみると、Watanabe, Y. Shiel, A. (2001)らが行った質問紙調査では、イギリスと日本において外傷脳損傷患者と同居する家族間に起こっていることは、両国ともほとんど同じであったが、イギリスの人々は高次脳機能障害者の引き起こす問題に対処する方法についてより多くを知っているようだったとしている。また、Calvete, Esther (2012)らが行った調査では、家族への将来の介入は受容とポジティブシンキングのような受容的対処方略を開発することを目的として介護者に貢献するような emotional support, instrumental support and professional support の社会的ネットワークを改善すべきであると述べている。

これらのことより、外傷性脳損傷者家族にとって、急性期には情報を多く求めており、医療者はできるだけ家族と密に情報交換を

行い、家族が求めている情報を提供していく必要があることがわかった。また、外傷脳損傷の後遺症としては、高次脳機能障害が問題になることが多いが、脳卒中などの疾患による脳損傷の場合と同じように捉えている医療者の存在も指摘されており、日本の家族は対処法についてまだ十分周知されていない可能性が高いといえよう。このようなことから対処法についての具体的提案が待たれているようである。さらに、家族は抑うつ傾向に陥ることも多く、家族への介入として、受容とポジティブシンキングのような受容的対処方略の開発が待たれている。

（文献）

- Arango-Lasprilla JC, Quijano MC,Aponte M,ら, Family needs in caregivers of individuals with traumatic brain injury from Colombia, South America. Brain Injury, 24, 7-8, 1017-1026,2010.
- Calvete, Esther, de Arroyabe, Elena López, Depression and grief in Spanish family caregivers of people with traumatic brain injury: The roles of social support and coping. Brain Injury,26,6m834-843,2012.
- Elaine Bond, Christy Rae Lee Draeger,Barbara Mandleco,Michael Donnnelly, Needs of Family Members of Patients With Severe Traumatic,Brain Injury. Critical Care Nurse, 23, 4, 63-72,2003.
- Kolakowsky-Hayner, S. A,Miner, K. D,Kreutzer, J. S, Long-term life quality and family needs after traumatic brain injury. Journal of Head Trauma Rehabilitation, 16, 4, 374-385,2001.
- Mathis, M, Personal needs of family members of critically ill patients with and without acute brain injury. J Neurosurg Nurs,16,1,36-44,1984.
- Watanabe, Y. Shiel, A. McLellan, D. L. Kurihara, M. The impact of traumatic brain injury on family members living with patients: a preliminary study in Japan and the UK. Disabil Rehabil, 23,9,370-378,2001.

(2) インタビューの実施について

(Table 1. Table 2.参照)

外傷性高次脳機能障害者（全員が男性）を介護する主介護者（全員が女性）4名を対象に延べ6回、聞き取りを行い、質的研究デザインを用いて分析した。インタビュー時間は、1人当たり平均1時間48分であった。

Table 1. Caregiver Characteristics

case	Relation to Patient	Age	Preinjury and Current Occupation
A	Mother	60s	Parttime worker
B	Wife	50s	Housewife
C	Mother	60s	Housewife
D	Mother	60s	Housewife

Table 2. TBI Patient Characteristics

case	Age at Time of Injury	Preinjury Occupation	Time Since Injury (years)
A	17	High school student	18
B	42	Public Worker	12
C	34	Company employee	15
D	18	University Student	12

主介護者は、脳外傷後に起こり得る人格の変化など、予後について説明を聞いた者とそうでない者とではその後の対処方法が異なっていた。

説明を聞いた介護者は、予期せぬ出来事が突然出現したことに困惑しながらも、医療者が発した「意識状態が改善している」言葉を支えに患者の介護を行っていた。医療者からの促しもあり積極的にケアに参加し、入院中よりリハビリの場面を応用した関わりを見出し、自分たちができることを実行していた。できるだけ早期の在宅での生活を望み、生活の立て直しを行っていた。また、受傷時に主治医から聞いた「性格が変わる」ということはどういうことなのか、と思いながら、性格の変化が現れた場合は、対応の試みを行い、対応の学びを行っていた。困難な対応については、医療関係者に相談を行い対処をする傾向にあった。

一方、説明を聞いていない介護者は、予期せぬ出来事が突然出現したことに困惑しながらも、身体状況が改善すれば意識状態や人格の変化が元に戻ると思いそのことに希望を見出していた。在宅生活に移行してからも、リハビリを患者に受けさせるのに懸命になりながらも人格の変化に対し「何かおかしい」と感じながらも対処法を見つけられないでいた。また、医療者よりも友人からの支援を受けながらどのような対処法を用いるといいか探していた。偶然手にした情報などから高次脳機能障害という障害の理解を深めており、それまでは、対処法のわからなさに

より困惑しながら、涙がでるような戦いを続け、対応を試みていた。
研究参加者は、医療者のすすめや偶然手に入れた情報から家族会に入会しており、家族会は自分たちを支えてくれる場であると認識していた。家族会で出会った同じ状況の介護者を見て、今は大変でもいつかあんな風になれる日がくると信じ日々を過ごしていた。家族会に参加し、困っていることを相談することで対処法の学びをしている者もいた。

（得られた成果の国内外における位置づけとインパクト）
文献レビューの結果、高次脳機能障害についての予後情報を得ていない家族がどのような経過をたどるのかについては文献が見当たらなかったため、本研究は有益な情報になることが予想される。高次脳機能障害については、入院中に症状がでないこともあり、認知障害や人格の変化についての情報を持たずに退院する家族もいることが予測されるため、入院中にパンフレットなどを用いた情報の提供を行うことに意義があることを裏付けられる資料になると考えられる。

（今後の展望）
4名の対象者では、依然分析に用いる対象者数が少なく一般化に近付けるためには、今後も対象者を増やし分析を続けていく必要があり、実際にその計画を立てている。
文献レビューの結果、急性期にある患者の家族は、情報のニーズが高いことが分かったが、どのような情報を必要としているのか、あるいは、医療者からもたらされた情報をどのように受け取り、その後の介護生活の中に取り入れているのか明らかにすることが必要だと考えられた。さらに、高次脳機能障害に関する情報を入院中に得ていた介護者は、医療関係者とも良好な関係を築き、どのような関わりが介護者にとって助けになったかを語っていたため、その語りについて分析を進め、医療関係者に対する意味ある資料にまとめることを考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計１件）
<u>Terumi Yamai</u>, Tomoko Inoue, Tomomi Tsujimoto, nfluence of providing prognostic information to the family of traumatic Brain Injury patient during the acute period, WFNN Congress 2013, Gifu, Japan (in press)

６．研究組織
(1)研究代表者
山居　輝美　　(YAMAI TERUMI)
梅花女子大学・看護学部・講師
研究者番号：50326287

(2)研究分担者
なし　　(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
なし　　(　　)

研究者番号：